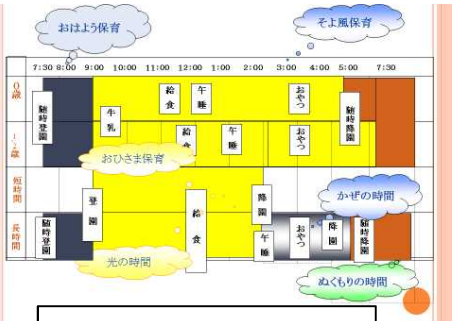
平成２８年１月２１日
教育課程部会幼児教育部会
資料4

預かり保育、子育ての支援について

ゆうゆうのもり幼保園　港北幼稚園　園長　渡邉英則

預かり保育、子育ての支援を考えるに当たって

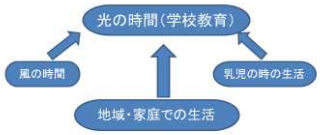
ゆうゆうのもり開園時（平成１７年）に横浜市から求められた保育時間の図。通常の教育時間より、預かり保育の時間が長い。預かり保育が長くなればなるほど、教育課程の時間だけでは、子供の育ちを保証できない。預かり保育という言葉自体が、教育時間の付け足しという印象を与える。



子供の 24 時間を見通した上での生活を考える

そこで、子供の２４時間を視野に入れた保育を考えた。光の時間（教育時間）、風の時間等（預かり保育）、それぞれの時間に在園する子供の状況に応じて、ふさわしい教育・保育を、幼稚園教育の基本を生かして考えていくことにした。

新たな制度では、認定こども園や幼稚園も含め、家庭や地域の教育力が高まる工夫が必要！



風の時間だけでなく、地域・家庭も含め、多様な経験をする子供が集まって、光の時間の教育・保育の質が高まっていく。

幼稚園教育の質を向上させるには、教育課程だけの時間を考えていても、地域や家庭の教育力が低下している現状では、そこだけに特化して質を高めることは不可能。入園前の子供の生活の向上、預かり保育の質、家庭や地域の教育力の向上（子育ての支援）等があって、質の高い学校教育を行うことができる。

１．預かり保育について

（１）預かり保育の位置付け

・単に長く預かれば良いという保育になっている園が多い。

・公立幼稚園でも、教育課程ではない教育活動という位置付けのため、預かり保育の位置付けは付け足し的になっていることが多い。現状の位置付けに対し、教師には抵抗感がある。

・預かり保育専用の部屋がないなど、環境的に不十分な場所で行われることがある。

（２）預かり保育を誰が担当するか

・パートの保育者が預かり保育だけを受け持っているケースが多い。

・パートの保育者であるために、正規職員と連携が取りにくい。

・新人保育者が、教育課程に係る教育時間も含め、長時間受け持つ場合もある。

・預かり保育では、少数の子供を担当するからこそ、子供と保育者との信頼関係が求められる。

・クラス担任経験者が預かり保育を担当し、子供や季節に合った指導計画が立てられると預かり保育の質は向上する。

・預かり保育を担当した保育者が一年間を通して、預かり保育の指導計画を考えたり、いろいろな子供との関わりなどで自分の保育を振り返り、また担任に戻ってくるような体制になると、連携等がしやすくなる。

（３）預かり保育の内容

・保育者がパートや新人などの体制だと、部屋の中でただ、テレビを見せているなど、保育内容は単調なものになりやすい。

・「園にいることが楽しい」と思えるような計画を作成し、保育内容をどう工夫するか。

・預かり保育ならではの保育内容・方法を更に研究する必要がある。研修の必要性。

・預かり保育を充実させる中で、園の保育そのものを変えていく可能性がある。

・預かり保育では、個々の子供に応じた保育がしやすい。個別に関われることで、通常の保育では見えない子供の姿が見られることもある。

・給食室がない場合、おやつは、市販の菓子が多く、種類も少ない。季節に応じたおやつ、手作りおやつ、自分たちでおやつを買いに行く等の工夫をしている園は少数。

・異年齢集団の保育をどのように行って行くかを考える必要がある。

・午睡をどのように扱うか。午睡をするかしないか、するならばどこで午睡をするか、きちんとした場所を確保する必要がある。

・配慮の必要な子供の保育は、保育時間が長時間になると更に難しさが出てくる。

・地域の資源を上手に利用できるかどうかも預かり保育の質を大きく左右する。

（保護者ボランティア、小学生ボランティア、地域ボランティア等の活用、近くの公園や公共施設、学校などの利用）

・「預かり保育は家庭的な雰囲気を大事にしている」という言葉の危険性。家庭的というだけで、遊ぶものなど環境が十分に用意されていない。
・多様な体験や遊び、多様な人と触れ合う機会が大事ならば、家庭的だけでは保育とはいえない。
・４月、５月の頃の新入園児の預かり保育をどのように開始するか、どのような対応が必要かも検討課題。

（４）長期休暇中の保育について
・長期休暇中のシフトをどのように組むかは大きな課題。
・普段の保育ではできない保育をするチャンスとすると保育の幅が広がる。
・毎日、同じような活動の繰り返しを避けるような計画の必要性。
・シフトを工夫し、チームを組むなどすることで、園内研修にすることも可能。

（５）保護者との連携
・子供を預けたいという思いが強く、仕事の有無に関わらず、常に長時間の預かり保育を利用しようとする保護者がいる。
・保護者に、子供の様子や必要に応じて預かり保育の時間を調整するようなことができるかどうか。
・保護者との連携をどのように取るかを研究する必要がある。独自の預かり保育たよりの発行。ドキュメンテーションなどの利用。
・保護者同士の関係をどのように築いていくかにも配慮する必要がある。日常的に長時間預ける保護者と、預かり保育をほとんど利用しない保護者がどのように顔見知りになっていくか。

２　子育ての支援について
（１）幼稚園における子育ての支援とは何かを考える。
・幼稚園が保護者との関係が密である特色を生かす。
・子育ての大変さを引き受けるだけでなく、子供という存在がどれだけ魅力的かを伝える役割を果たす。（これが本当の少子化対策であるはず）
・きちんと保護者に幼児教育・保育のことを伝えていくこそが本来の子育ての支援。遊びを通して育つことを理解し、そのことを支えてくれる保護者になっていくような仕掛けが必要。
・その意味では園からどのような情報発信をするかも、子育ての支援のひとつの重要な役割といえる。園だより、クラスだより、ホームページ、ブログ等の利用。
・保育参加、サークル活動などを通して、保護者が子供と関わる楽しさを知る。
・サークル活動等で、異年齢の保護者同士が関わる機会を作ることが、そのまま子育て

の経験談を話す場となり、子育ての支援になることが多い。

・保護者が自分の子供以外の子供と関わる経験をする中で、子供との関わりを通して、地域、社会に関わる楽しさを知る。（親が親になっていく）

・幼稚園の保護者や卒業生の保護者を地域の子育て支援の担い手として地域に送り出していくのも、幼稚園の大きな役割といえないだろうか。

・子供を通して、保護者同士の関係を広げ、新たな地域を築いていく。
（子育ての支援の支援をしていくことは、幼稚園の大きな役割）

・配慮の必要な子供や外国籍の子供などと関わり合う中で、保護者も含め、多様さを認め合う社会を幼稚園時代から構築していく。

・子供の成長を語るときに、幼児期のエピソードがない、または、語れない保護者を作らない。幼児期こそ親子の豊かなエピソードが必要。

（２）入園前の保護者に対する子育ての支援の必要性

・幼保小の重要性が高まる中で、入園前の子供について、どのような連携を持つかを考える必要がある。

・０歳から２歳の子育てで悩んでいる保護者とその子供を引き受けなければならないのが幼稚園。配慮が必要な子供や、子育てがうまくいかない保護者に、幼稚園として何ができるのかを考えておく必要がある。

・保護者の「良い子」に育てなければという強迫的な思いが育児を難しくしている。

・子供が汚れてもいい、けんかになることが必要な経験だということが一般化されていない。

・結果として、幼児期の基本である遊びを通しての教育の意味が理解されない。

・０歳から２歳の親子に向けた園庭開放や子育ての支援拠点などの連携の必要性。子育て拠点に砂場があるだけで、保護者は汚れて遊んでもいいということに気付く。

・園の状況が許せば、就労していない保護者に対して、一時預かり制度を実施できるような体制を作ることも必要。乳幼児期に子供と一緒にいたいという保護者をきちんと支える。